The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	デス・エデュケーションが及ぼす効果に関する影響 ; 試作プログラムによる介入実験を通して
Author(s)	赤澤, 正人; 辻本, 寛和
Citation	臨床死生学年報. 2003, 8, p. 2-14
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/12392
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

デス・エデュケーションが及ぼす効果に関する研究
～試作プログラムによる介入実験を通して～

赤　澤　正　人*
辻　本　寛　和**

key words：デス・エデュケーション，介入実験，プログラム，効果，自殺予防

Ⅰ．序論
1．はじめに

近年、死の長期化や病院死の増加から、人生の最期をいかに自分らしく送るかに注意が向けられ始めている。緩和医療の発達やホスピスの増加はまさにこの動きを反映していると言える。

しかしながら現代社会では、核家族化の進行や病院死の増加などで、死を直接的に体験する機会が減少したこと、マスメディアによる虚構の死の経験が増加したことなどといった、死に関する経験や認識の不足がしばしば指摘され（大倉，1985; 高木，1999; 柏木，2001)、死をタブー視しているとも指摘されている（デーケン，1986)。このような現状の中で我々は、日常生活において死について真剣に考える機会を掴めずにいる。その結果、死に対する心構えができないままになってしまい、死が目前に迫った時点で初めて死を自覚的に意識するため、人生の最期を自分らしく生きられないといった事態を招いていた。デーケン（1986）は、人生最大の試練であるはずの死に対して、何の準備も行わないまま向かわせるのは社会の態度として残酷ではないかと指摘している。

また少年による暴力行為や殺傷事件が相次ぐ中、生きていることの大切さや生かされていることの尊さを、本人が実感できる形で教えることが必要になってきている。命をはぐくみ育て、守っていくための教育をどのように進めるかを考えることは、現在の教育界が担うべき重要な課題である（柏木，2001)。

このため近年、日本において、特に医療や看護分野、学校教育の中で、死をタブー視せず積極的にテーマとするデス・エデュケーションへの関心が高まってきている。デス・エデュケーションとは、積極的に死について学ぶ thanatology だけでなく、人の命が限りあるものであるということを前提にした教育プログラムである。例えば、医療・看護分野においては 2001 年度に全国ホスピス緩和ケア病棟連絡協議会・教育研修専門委員会によって「ホスピス・緩和ケア教育カリキュラム（多種多様)」が作成され、ホスピス・緩和ケアに従事するスタッフの学習目標が示された（田村・二見，2002)。学校教育の分野では「兵庫・生と死を考える会」が授業の内容を具体的に検討し、カリキュラムを組んでデス・エデュケーションを試験的に行おうとしている（高木，1999)。

しかし、学校教育の分野に注目すると、デス・エデュケーションは正式なカリキュラムとし

*大阪大学大学院人間科学研究科　**大阪大学人間科学部

ては組まれていない。「兵庫・生と死を考える会」のように、試験的に行おうとしている団体もあるが、デス・デュケーションの必要性を感じながらも、教育の中に取り入れることに戸惑いを感じる教師は多い（鈴木, 2001)。鈴木（2001）の報告によると、デス・エデュケーションを学校教育の中に取り入れることに教師が抵抗を感じる理由として、指導方法がわからないこと、カリキュラムが存在しないこと、時間的余裕が無いこと、宗教と関わることなどが挙げられている。鈴木（2001）はデス・エデュケーションの展開に向けての前段階として、職員の研修ならびにカリキュラムの導入が急務であると指摘している。こうした理由のほかには、デス・エデュケーションの効果や弊害がはっきりと提示されていないことが考えられる。

諸外国においては、デス・エデュケーションの効果や影響を測定した研究は数多くあるが、日本においてそのような実証的研究は少ない。デーケン（1986）は、自分が受け持つ講義（デス・エデュケーション）の終了後には、学生の多くが死に対して積極的に考えたり、命の大切さを再認識したりするようになったと述べている。このようにデス・エデュケーションの有用性が論じられることは多いが、その有用性が実証的データに基づいて示されることが少ない。デス・エデュケーションの効果や弊害が実証的に示されれば、実施に戸惑いやためらいを感じる学校教師に対して一つの意義ある参考資料となることが考えられる。

そこで本研究では、まずデス・エデュケーションの効果や目的、方法に関して先行研究を概観する。そして先行研究に基づき介入プログラムを作成し、それを用いたデス・エデュケーションがどのような効果を及ぼすのかを明らかにする。

2．文献調査

2―1．デス・エデュケーションの効果および目的

デス・エデュケーションの効果を測定した研究は数多くあり、そのほとんどが死の不安・恐怖の軽減を効果の指標としていた。そしてその結果は研究によって全く異なっている。例えば、デス・エデュケーションの後に、死の不安・恐怖が軽減したという報告がある（e.g., Murray, 1974; Durlak, 1978; Miles, 1980; Yeaworth, Kapp & Winget, 1974; Johansson & Lally, 1990)。その一方で、デス・エデュケーションの後に死の不安・恐怖が増加したという報告もある（Bell, 1975; Combs, 1981; Wittmaier, 1979)。このように、死の不安・恐怖に焦点を当てた研究結果は一貫していない。こうした研究結果の相違の理由としては、死に対する被験者の考え方の違いや、教育内容の不適切さ（Neimeyer, 1988)、教育プログラムの違い、教育セッションの回数などが考えられる。

ここでデス・エデュケーションの目的について考えてみると、確かにその目的の一つに死の不安・恐怖の軽減があげられる。しかしそれは過度の不安・恐怖がある場合（デーケン, 1986）であり、死に対する不安・恐怖を完全になくすことではない。死は生命の終わりであり、不安や恐れを抱くのはむしろ自然なことである。死の不安・恐怖のみに焦点を当てただけでは、デス・エデュケーションの様々な効果を検討することは不可能である。

死の不安・恐怖を軽減する以外のデス・エデュケーションの目的には、死を身近な問題として考え、生と死の意義を探究し、自覚を持って自己と他者の死にそなえての心構えをさせることがある（デーケン, 1986)。またデーケン（1986）は、悲嘆教育、死にまつわるタブーを取り除くことなど15の目標を挙げている。高木（1999）は、死をテーマとして、今生きていることの尊さを可能な限り理解し、実感させることがその目的であるとしている。平山（1985）

や、Levinton & Frentz (1978)、Hayslip & Cynthia (1993) は，死を学ぶことを通して生と死が無関係でないことを理解し、人生を見直すきっかけになると述べている。また多くの論者が指摘しているように、デス・エデュケーションには、死を学ぶことによって生きることの大切さ・尊さを学ぶという、生命尊重の教育・生き方の教育という目的がある（小倉・中村, 1989; 木村, 1990; 高木, 1999; 柏木, 2001)。

これらのことから、これまではデス・エデュケーションの目的や効果として、死の不安・恐怖のみに焦点が当てられてきたが、今後は死への関心や命の大切さ、生への意識にも注目しなければならないといえる。

2—2．デス・エデュケーションのプログラム

デス・エデュケーションのプログラムは、主として教示的（didactic）プログラムと、経験的（experiential）プログラムに分類される。教示的プログラムの試みは、死に関連する出来事についての知識と理解を高めようとするものである。そのために講義形式の授業や、視聴覚的な教材を用いた授業、ケースプレゼンテーション、そしてグループでのディスカッションが用いられる（Durlak & Riesenberg, 1991; Papadatou, 1997; Maglio & Robinson, 1994)。経験的プログラムの試みは、死と関連する出来事や個人的な感情に焦点を当てて、個々人がそれらについて論議するように手助けしようとするものである。死についての情報を提示するために、教示的プログラムと同様の手段が用いられるが、個人の感情や経験を引き出し共有するために、空想やロールプレイ、そしてシミュレーションが用いられる（Combs, 1981; Durlak & Riesenberg, 1991; Maglio & Robinson, 1994)。

教示的プログラムと経験的プログラムの間に、その内容とプロセスが重複する部分があり、ディスカッションなどの教示的なプログラムのいくつかは、経験的なプログラムに含まれる。二つのプログラムの効果について、Durlak & Riesenberg (1991) は、経験的プログラムが、死の不安や恐怖を軽減するのに効果的であり、教示的プログラムは否定的な効果をもたらす傾向があると報告している。デーケン（1986）も、デス・エデュケーションは単なる知識の伝達にとどまるべきではないとし、ワークショップを通して死に関連した感情レベルの問題に取り組むことができると指摘している。よって、デス・エデュケーションのプログラムは、死に関する情報や知識の伝達のみにとどまるだけでなく、対象者が自ら積極的に死について考えさせるようなプログラムが効果的である。

対象者が興味を持つような工夫として、例えば吹山・三宅・得丸（2001）は、子ども達に人気のアニメキャラクターを用いたデス・エデュケーションの教材を開発している。そしてそれを用いて小学生を対象に授業を行ったところ、子ども達が大変興味を持って視聴し、デス・エデュケーションの導入として有効な教材になりうることを報告している。また竹内（2001）は、小学生を対象に人形劇を用いたデス・エデュケーションを試み、劇終了後の死別体験や、死に対する感情、命についての話し合いのよいきっかけとなったと報告している。話し合いや、ディスカッションは他者の考えを知り、感情を共有する上で非常に重要なものである。

諸外国においては、デス・エデュケーションに関する研究が盛んに行われており、死の概念や教育プログラムを扱った研究が数多くなされている。日本でも徐々に生と死に関する教育の動きが見られつつあるが、欧米などで用いられている教育カリキュラムやテキストを直接持ち込むことは多くの危険を伴うことを認識しておかなければならない。なぜなら諸外国のテキス

トや方法は宗教教育に立脚したものが多いからである（高木, 1999)。

日本でデス・エデュケーションを実践している教師は全国的に見てもわずかであり、日本独自のデス・エデュケーションのカリキュラムの作成は手探り状態である。デス・エデュケーションを積極的に展開していくためには、そのカリキュラムの検討や、教職員に対する死や命に関する研修機会の設置、そして授業プログラムの開発は早急に取り組まなければならない課題であると考えられる。

得丸（1999）は、デス・エデュケーションへの取り組みを比較的容易にする上でも、プログラムの必要性が大きいことを指摘している。高木（1999）は、デス・エデュケーションを教育現場で行う場合の留意点として、子どもの発達段階をよく理解しておくことを挙げている。子どもだけに限らず、対象者の発達段階を理解しておくということは、プログラム開発において重要な点である。

以上のことから、デス・エデュケーションのプログラムには、生と死に関する情報を提起するのみにとどまらず、対象者が積極的に授業に参加し、提起された問題に関して自らの考えを持つような内容及び授業の展開が求められる。

Ⅱ．目的および介入プログラム

1．本研究の目的

本研究では、大学生・大学院生に対してデス・エデュケーションの介入実験を行った。

本研究の目的は、実験者が作成したプログラムを用いて、介入によって目的通りの効果が得られるかどうかや、介入に弊害がないかどうかを既存の尺度や実験者が考案した質問項目を用いて実証的に示すことである。

具体的な介入の目的は、死への関心を高め、死のタブー意識を和らげること、生きていることの充実気分と、生への意識を高めることである。なお死の恐怖・不安に関しては、極端な場合は緩和を目的とし、そうでなければその増減を目的としない。

またデス・エデュケーションは死というデリケートなテーマを積極的に扱うため、様々な弊害が懸念される。特に死について考えることで希死念慮があらわれたり、自殺を肯定する考えがあらわれたりすることも考えられる。「いずれ死ぬのなら今から生きていてもしょうがない」といった人生の無意味さや自暴自棄な考えがあらわれるかどうかも測る必要がある。そこで抑うつ感を測定し、デス・エデュケーションによる効果を検討する。

2．介入プログラム

内容については、前半部分を高木（1999）のカリキュラムを参考に構成し、後半部分は実験者が様々な現場で行われる多様なデス・エデュケーションをできる限り網羅するよう構成した。このデス・エデュケーションは、全体で約2時間のプログラムであり、前半約40分の命の大切さに関する教育のセクションと、後半約40分の死について考えることの大切さに関する教育のセクションから成る。なお両セクションとも、市販のプレゼンテーションソフトで作成した教示スライドを用いて授業を進めた。

まず前半部では、現在子どもを取り巻く死に関する状況を簡単に説明し、「なぜ命は大切なのか」と問う子どもがいることを提示した。次に命の大切さや生きていることのありがたさを実感させるためのワークを実践した。具体的には、Ａ３用紙に被験者の両親、その両親、その

また両親というように10代さかのぼる樹形図を書き出すよう求めた。一人の人間がこの世に生を受けるのに無数の命のつながりがあることが、実際に手を動かすことを通して実感できることを意図した。次に、現在の生活で、世話になっている人・感謝している人をＡ４用紙に書き出すよう求めた。また、その人から受けた恩を、思いつく限りできるだけたくさん書き出し、その人に自分が何をできるか、どのようなお礼ができるかを書き出すよう求めた。セクションの途中でワークの感想や意見を求めた。意見のある被験者は挙手して発表した。

次に後半部では、現在の病院と死の関係を説明した。死に関することは前もって考えておいたほうがよいことを説明した上で、実際に死に関することを考えさせるワークを実践した。具体的には、がん告知をされたとき、その事実を受け入れることができると思うか、これから残された時間をどのように過ごしたいかを尋ねた。また根治治療と緩和ケアとのメリットを説明した上で、どちらを優先させたいと思うかを尋ねた。さらに、老衰や末期がんで臨終のときに蘇生措置を望むかどうか、病理解剖に同意するかどうか、脳死の場合に臓器提供に同意するかどうかを尋ねた。これらの問題は、前もって意思表示をしておくことで家族や近親者の負担を軽減できることを説明した。前半のセクション同様、セクションの途中で感想や意見を求めた。

最後にデス・エデュケーションの概要を説明した。

Ⅲ．方法

１．対象者

被験者は、実験協力の同意が得られた大阪府内の国公立大学に通う大学生・大学院生12名で、男性7名、女性5名、平均年齢23.1歳（SD=2.94）であった。

２．手続き

実験は実験者2名で行った。被験者に、実験室でデス・エデュケーションの介入を実施した。介入はグループ介入で、12名に一度に実施した。実験室は30名程度が入ることができる大学構内の教室を使用した。

実験開始前に、被験者に文書と口頭で実験の内容を伝え、実験参加の意思を再度確認し、同意の得られた参加者に同意書への署名を求めた。続いてデス・エデュケーションの介入前に、質問紙への記入を求めた。この時点で過度な死への恐怖・不安を持つ対象者がいる場合、介入中に特別な配慮が必要になると考えられたため、死への恐怖・不安の尺度得点を確認した。

そしてデス・エデュケーションの介入を行い、介入終了後に再度質問紙への回答を求めた。その後、被験者に質問紙を封筒に入れて配付した。2週間後に質問紙への回答を求め、郵送によって回収した。

３．測度

介入によって目的通りの効果が得られるかどうかや、介入に弊害がないかどうかを実証的に示すため、既存の尺度や実験者が考案した質問項目を用いた。

死のタブーを取り除けたかどうかを測るため「死からの回避」「死への関心」を、デス・エデュケーションの生に対する肯定的側面を測るため「人生に対して死が持つ意味」「生への意識」「一般的充実気分」を、デス・エデュケーションの弊害を測るため「抑うつ感」「死への恐怖・不安」を用いた。

1）「死への恐怖・不安」・「死からの回避」・「死への関心」：いずれも平井・坂口・安部・森川・柏木（2000）が作成した死生観尺度の下位尺度を用いた。回答はそれぞれの項目について「全くあてはまらない」から「非常にあてはまる」の7件法で求め、因子ごとの項目における得点を合計して採点する。「死への恐怖・不安」は、合計得点が高いほど死に対して恐れや不安を抱いているということを意味する。「死からの回避」は、合計得点が高いほど死について考えることを回避しており、死のタブー意識が強いこと意味する。「死への関心」は、合計得点が高いほど死への関心が高く積極的な態度であることを意味する。

2）「人生に対して死が持つ意味」：死に対する態度尺度（丹下, 1999）の下位尺度を用いた。「人生に対して死が持つ意味尺度」は高得点であるほど死に意味を認めることを意味する。回答は「全くあてはまらない」から「非常にあてはまる」の7件法で求めた。

3）「一般的充実気分」：充実感尺度（大野, 1985）の下位尺度である「一般的充実感」の5項目を用いた。「一般的充実気分」は得点が高いほど生きることに充実感を持っていることを意味する。回答は「全くあてはまらない」から「非常にあてはまる」の7件法で求めた。

4）「抑うつ感」：GHQ（The General Health Questionnaire：精神健康調査票）の日本語版（中川・大坊, 1985）の下位尺度である「うつ傾向」の7項目を用いた。「うつ傾向」は得点が高いほどうつ傾向が病的に強いことを意味する。回答は「全くあてはまらない」から「非常にあてはまる」の7件法で求めた。

5）「生への意識」：この項目は、命の大切さや尊さ、そして生きていることのありがたさに関して、実験者2名のブレインストーミングと、大学生10名を対象にした自由記述のアンケートから得られた回答を参考に6項目を作成した。項目は「周りの人を大切にしようと思う」、「他の人への思いやりを持とうと思う」、「他の人のおかげで生きていられると思う」、「命は尊いものだと思う」、「命はかけがえのないものだと思う」、「生きていることに感謝の気持ちを感じる」からなる。回答は「全くあてはまらない」から「非常にあてはまる」の7件法で求めた。得点が高いほど、命の尊さや周囲への感謝の気持ちを持っていることを意味する。

4．統計解析

デス・エデュケーションの介入前と介入後、2週間後の効果を調べるために、各測度について、測定時期3（介入前・介入後・2週間後）と性別2（男・女）を要因とする2要因分散分析を行った。

なお、統計解析には統計ソフトウェアSPSS 10.0 for Macintosh（SPSS Inc., 2000）を使用した。

Ⅳ．結果

介入前後、2週間後の変化

表1に測定時期の性別による各測度得点の平均値を示す。そして、表2に分散分析結果を示す。図1および図2に、介入前後、2週間後における各測度得点の平均得点の変化を示す。

分散分析の結果、測定時期の有意な主効果がみられたのは「死への関心」（F（1, 11）=14.00, p<.01)、「一般的充実気分」（F（1, 11）=7.82, p<.05)、「抑うつ感」（F（1, 11）=4.49, p<.10）であった。Tukey 法による多重比較の結果、介入前後で「死への関心」（p<.05）の得点が有意に上昇していた。また介入前後で「抑うつ感」（p<.05）の得点が有意に低下していた。介入前と 2 週間後の変化では「死への関心」（p<.001）と、「一般的充実気分」(p<.05)の得点が有意に上昇し、「抑うつ感」（p<.01）の得点が有意に低下していた。

男女の各測度について、測定時期と性別についての交互作用は全て有意ではなかった。

本研究の介入は、デス・エデュケーションが持つ効果のうち、死の恐怖・不安の軽減だけでなく、死を考えることが生きることに対して持つ肯定的な効果にも焦点を当てた。表 3 は介入の目的と即時効果および継続効果との対応を表したものである。

即時的効果に関しては、「死への関心」と「抑うつ感」に改善が見られた。「死への恐怖・不安」、「死からの回避」、「人生に対して死が持つ意味」、「一般充実気分」、「生への意識」には有意な改善は見られなかった。これらのことから、今回の介入は死への関心に即時的に効果を持つことが考えられ、またこの介入によって抑うつ感が増大するような弊害はなく、むしろ改善されることが示された。

継続効果に関しては、「死への関心」が介入後に比べて有意に低下していたが、介入前に比べると有意に上昇しており、ある程度効果が継続していた。また「一般的充実気分」が介入前に比べて有意に上昇していた。「抑うつ感」に関しては、介入前と比べて有意に低下していた。

V．考察

1．デス・エデュケーションの効果

デス・エデュケーションの目的として、積極的に死について考える態度を身に付けることがある。「死への関心」について本研究での被験者は、介入前には「どちらかといえば死に関心がない」という態度だったが、介入後には「どちらかといえば関心がある」という態度に変化していた。そしてその効果は 2 週間後も維持されていた。このことから、今回のデス・エデュケーションの介入は死のタブー視を取り除き、死に対して積極的な態度を身に付けさせることに効果があったと言える。

また、デス・エデュケーションの目的の一つに「死に対する過度の不安を取り除くこと」がある。介入により死の不安が増大することも懸念されたが、「死への恐怖・不安」については介入前後で有意な差は見られなかった。本研究の結果はデス・エデュケーション後には死の不安と恐怖が増加した（e.g., Murray, 1974; Durlak, 1978; Miles, 1980; Yeaworth, Kapp & Winget, 1974; Johansson & Lally, 1990)、あるいは減少した（Bell, 1975; Combs, 1981; Wittmaier, 1979）とする先行研究と異なる結果である。しかしデーケン（1986）も指摘しているように、デス・エデュケーションの目的の一つが過度の死の不安や恐怖を軽減することであり、死に対する不安や恐怖を完全になくすことではない。死は生命の終わりであり、不安や恐れを抱くのはむしろ自然なことなので、介入の目的に見合う妥当な結果だった。

「抑うつ感」については介入の前後で有意な改善が見られた。このことから、デス・エデュケーションを行っても抑うつ状態になったり希死念慮を抱いたりするような弊害はないことが示された。デス・エデュケーションが抑うつ感に有意な改善をもたらすということを実証した先行研究は見当たらなかったが、デーケン（1986）は、自分が受け持つデス・エデュケーショ

表１　測定時期の性別による各測度の平均値

	介入前		介入直後		２週間後	
	男（N=７）Mean(SD)	女（N=５）Mean(SD)	男（N=７）Mean(SD)	女（N=５）Mean(SD)	男（N=７）Mean(SD)	女（N=５）Mean(SD)
死の恐怖･不安	13.20(4.32)	12.85(3.89)	10.60(5.12)	13.42(5.82)	12.80(5.06)	12.71(6.04)
死からの回避	10.60(3.04)	7.57(2.76)	10.00(4.30)	5.85(1.67)	10.20(4.08)	7.57(3.20)
死への関心	12.60(2.70)	13.42(4.27)	19.00(1.87)	20.57(2.63)	17.40(1.34)	16.71(4.19)
人生に対して死が持つ意味	30.80(4.86)	30.71(4.42)	31.60(3.97)	34.14(4.37)	31.80(3.03)	32.71(2.81)
一般的充実気分	31.40(4.03)	31.00(1.73)	31.60(3.97)	31.57(2.22)	31.80(3.83)	31.71(1.79)
抑うつ感	12.40(7.12)	9.00(2.00)	10.60(5.85)	8.14(2.19)	11.40(7.63)	8.00(1.00)
生への意識	40.2(2.94)	39.42(1.71)	38.40(5.94)	40.28(1.60)	39.60(4.82)	39.71(2.28)

表２　各測度における分散分析結果

	性別 F値	測定時期 F値	交互作用 F値
死の恐怖･不安	0.09	0.03	0.01
死からの回避	4.18†	0.05	0.05
死への関心	0.15	14.00**	0.49
人生に対して死が持つ意味	0.28	2.92	0.32
一般的充実気分	0.01	7.82*	0.62
抑うつ感	1.39	4.49†	0.00
生への意識	0.05	0.07	0.51

†p<.10, *p<.05, **p<.01

表３　介入目的と即時効果および継続効果

	恐怖・不安	回避	関心	死の意味	充実気分	抑うつ	生への意識
介入の目的	ns	−	＋	＋	＋	ns	＋
即時効果	ns	ns	＋	ns	ns	−	ns
継続効果	ns	ns	＋	ns	＋	−	ns

＋は尺度得点が有意に上昇することを、−は有意に低下することを表す
ns は尺度得点が有意差なし（not significant）を表す
即時効果は介入前と介入直後の尺度得点の多重比較を示す
継続効果は介入前と介入２週間後の尺度得点の多重比較を示す

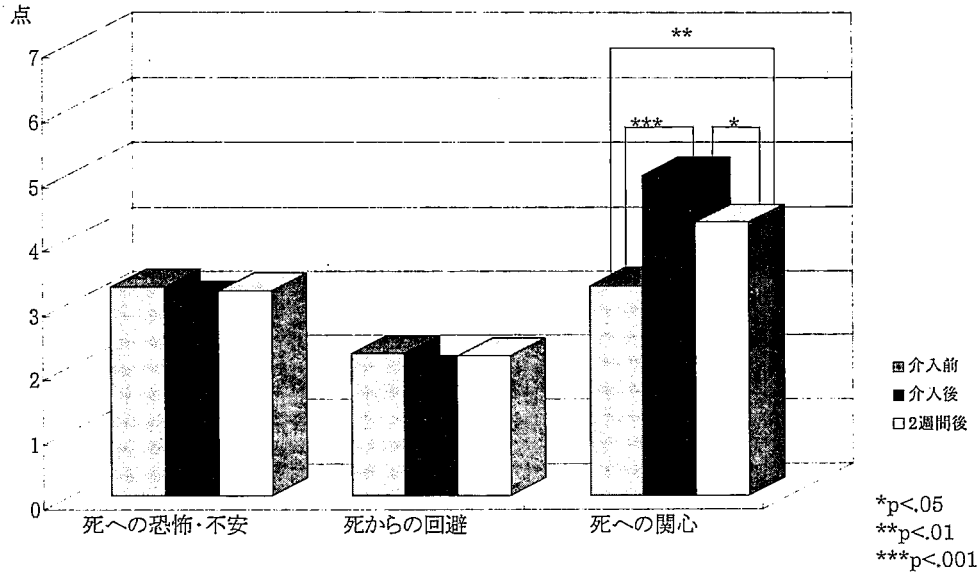

図1　介入前・後・2週間後の各尺度平均得点の変化

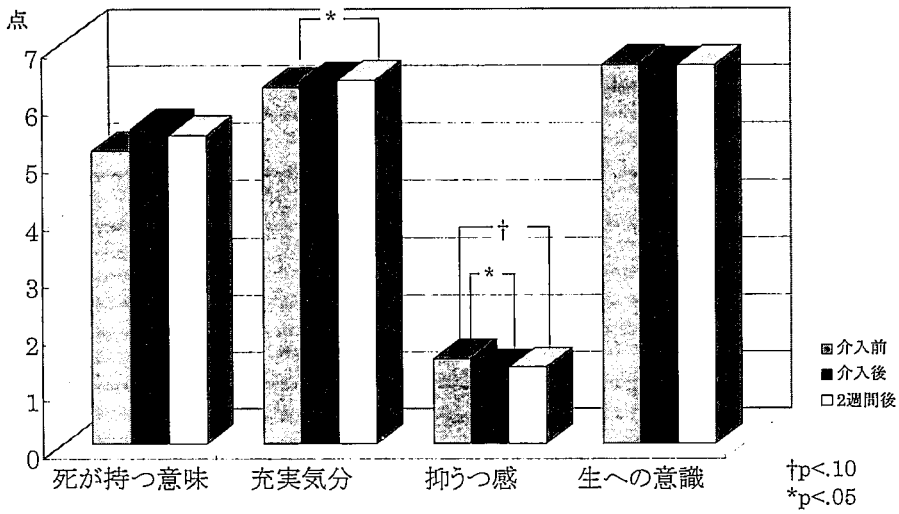

図2　介入前・後・2週間後の各測度平均得点の変化②

ンの講義の終了後には、学生の多くが命の大切さを再認識したと述べている。今回の介入では過去にお世話になった人を思い出させるワークなどを行った。このようなワークが抑うつ感は改善につながったのかもしれない。

デス・エデュケーションの肯定的な効果について、「一般的充実気分」は2週間後に改善が見られた。「人生に対して死が持つ意味」では介入前後で有意な改善が見られなかった。どちらの得点も介入前と比べてわずかではあるが上昇傾向にあり、もともと高得点ではあったが、肯定的な結果が得られたと思われる。一方、「生への意識」では有意な改善は見られず同程度の水準を維持していた。これは被験者の「生への意識」が介入前から既に高かったことが大きな原因として考えられる。介入前から高得点であったために、介入の効果が測れなくなってし

まったのではないかと考えられる。ディスカッションや感想の中では、「命のつながりをあらためて実感した」、「たくさんの人に支えられていることが分かった」とか「自分の目標に向けてがんばろうと思った」など、肯定的なものが多くみられた。これは先行研究とほぼ一致するものであるが（デーケン, 1986; 得丸・北原・石塚・田宮, 1999）、データで実証することはできなかった。しかし今回のデス・エデュケーションが、命の大切さや自分の生き方をあらためて考えるよい機会となったと考えることができる。

性差について、介入効果と有意な交互作用は見られなかった。高度に有意であればデス・エデュケーションを男女別に行う方が妥当であるが、今回の結果からは男女別に行う必要はないと考えられる。

2．介入プログラムの検討

本研究で作成した介入プログラムについて、前半部と後半部のどちらの介入が、どの測度に影響を及ぼしたかを検討する。

死の恐怖・不安の得点が有意な変化がなかったことに関しては、既述したことに加えて、作成したプログラムが、死の恐怖・不安の軽減を目的として作成していないため、本研究の結果は妥当なものであると考えられる。

前半部の命の尊さや、生きていることのありがたさを実感させることを目的とした介入は、一般的充実気分と生への意識に有意な影響は及ぼしていなかった。これは「命は大切である」とか「一人では生きていけない」などといった、世代に関係なく人間として了解できること（鈴木, 2000）を、介入によって改善することにある程度の限界があることを示していると考えられる。本研究の結果からも分かるように、介入前から対象者の一般的充実気分と生への意識は高得点であった。それらをさらに高めることは、難しいと思われる。むしろこれらの得点が低下しなかったことから、命を軽視するようになってしまう弊害が、デス・エデュケーションにはないことが示唆されたと考えられる。また対象者の感想は、ほぼ全てが肯定的なものであり、否定的な感想は皆無であった。これらのことから、前半部の介入は決して無駄なものではなかったと考えられる。本研究では有意な改善を量的に示すことはできなかったが、世代に関係なく人間として了解できること（鈴木, 2000）を再認識させるために有用なプログラムであったと考えられる。

死への関心には後半部の介入が影響を及ぼしたと考えられる。被験者は、実験者から提示された情報をもとに自分や家族の死の場面を想定し、自分ならどうするかを考えて、その意見を発表するという、積極的な参加が求められた。被験者に意見や感想を求める際に、時間の都合により挙手した被験者全員は発表できず、介入後にも「時間が足りなかった」「もっといろんな人の意見が聞きたかった」などの感想が聞かれた。被験者のこのような積極的な参加が、介入後とその後の有意な改善に結びついたと考えられる。特に、前もって考えておくことが非常に重要になるトピックを多く取り上げたことが、死への関心の改善に繋がったと考えられる。全体を通して、弊害なく生と死について学べる有用なプログラムであった。一方的な知識の伝達による教育ではなく、問題提起から話し合いへという過程をたどることで、対象者の興味や学習意欲を促し、主体的に考え学ぶという授業が展開できたのではないかと考えられる。

3．今後の課題

本研究の結果から、我々が開発したプログラムを用いたデス・エデュケーションは、死への関心を増大させ、抑うつ感を低下させる効果があった。しかし、なぜ抑うつ感が低下するのかを示すことができなかった。このためデス・エデュケーションの弊害がないことは示すことができたが、自殺予防という積極的効果については可能性を示唆するにとどめた。今後、自殺予防効果に焦点を当てた研究が待たれる。

本研究では統制群を設定していないことや、対象者の人数的限界があったため、本研究の結果がデス・エデュケーションの効果であると断言するには、慎重にならなければならない。特に抑うつ感と一般的充実気分の変化には、ライフイベントが大きく影響していることが考えられるため、それらが介入の効果によるものであると結論づけるには、本研究からは困難である。こうした課題への対処法として、無介入群の統制群を設定し、同じ質問項目を用いた調査を行い2群間で各測度の得点比較をする方法、より多くの対象者を設定する方法、インタビュー調査による質的研究などが考えられる。これらは今後の検討課題としたい。

デス・エデュケーションの有意な効果がみられなかった測度に関しては、介入以前の対象者の各測度得点が、既に高かったことあるいは低かったことが大きな原因として考えられる。介入前から高得点、低得点であったために、介入の効果が測れなくなってしまったと思われる。この対処として、実験前にスクリーニングを行うことが考えられる。

「生への意識」は、尺度としての信頼性および妥当性が示されていないものを用いたため、デス・エデュケーションの効果を測定するのに妥当な測度であったかは検討の余地が大いにある。ただし、命の大切さ・尊さに関する測定尺度は現在のところ存在しないため本研究では実験者が考案した項目を用いた。それに関連して、デス・エデュケーションの効果を測定する尺度も存在しないめ、今後の更なる研究が必要である。

今回の研究では、わずか一回のデス・エデュケーションでその効果を論じていることも大きな問題と思われる。先行研究では、複数のセッションを一ヶ月から三ヶ月行った後の効果を見ている。本研究では時間的制限や対象者確保の困難があったため、一回のみの介入であったが、これらは今後の大きな検討課題である。

Ⅵ．まとめ

近年、日本においてデス・エデュケーションの必要性が高まってきているが、国内での実証的研究はほとんどない。そこで本研究では、実験者が作成した介入プログラムをもちいて大学生を対象にデス・エデュケーションを行いその効果を明らかにした。その結果、デス・エデュケーションの後には死への関心が有意に上昇し、抑うつ感が有意に低下することが明らかになった。死への関心は一回の介入で継続的な効果が得られた。死への恐怖・不安、死からの回避、人生に対して死が持つ意味、充実気分、生への意識はデス・エデュケーションの前後で有意な効果は得られなかった。介入プログラムについては、対象者の介入後の感想も肯定的なものがほとんどであり、有用なプログラムであったといえる。本研究からデス・エデュケーションのプログラムの一例やその効果を示すことができた。しかし、本研究では統制群を設定していないこと、対象者の人数的制限、使用した測度の妥当性など多くの課題があることは否めない。これらは今後の検討課題としたい。

Ⅶ. 引用文献

Bell, W. D. 1975 The experimental manipulation of death attitudes: A primary investigation. *Omega*, **35**, 199-205.

Combs, D. C. 1981 The effect of selected death education curriculum model on death anxiety and death acceptance. *Death Education*, **5**, 75-81.

デーケン, A 1986 死への準備教育第１巻　死を教える　メヂカルフレンド社.

Durlak, J. A. 1978 Comparison between experiential and didactic methods of death education. *Omega*, **9**, 57-66.

Durlak, j. A. & Riesenberg, L. A. 1991 The impact of death education. *Death Studies*, **15**, 39-58.

Hayslip, B, Jr. & Cynthia, P. G. 1993-94 Effects of death education on conscious and unconscious death anxiety. *Omega*, **28**, 101-111.

平井啓・坂口幸弘・安部幸司・森川優子・柏木哲夫　2000　死生観に関する研究―死生観尺度の構成と信頼性・妥当性の検証―.　死の臨床, **23**, 71-76.

平山正実　1985　生と死の教育―とくに生涯教育の中で　樋口和彦・平山正実（編）　「生と死の教育―デス・エデュケーションのすすめ」　創元社, pp 144-169.

吹山八重子・三宅冬実・徳丸定子　2001　日本的いのち教育の教材開発－小学校高学年向けの教材－.　教材学研究, **12**, 136-138.

Johansson, N. & Lally, T. 1990 Effectiveness of a death education program in reducing death of nursing students. *Omega*, **22**, 25-33.

柏木哲夫　2001　ターミナルケアとホスピス　大阪大学出版会.

木村正治　1990　大学生を対象にした「死の教育」（Death Education）の実践とその評価.　学校保健研究, **32**, 443-450.

Levinton, D. & Frents, B. 1978-79 Effects of death education on fear of death and attitudes toward death and life. *Omega*, **9**, 267-277.

Maglio, C. J. & Robinson, S. E. 1994 The effects of death education on death anxiety: A meta-analysis. *Omega*, **29** (4), 319-335.

Miles, M. S. 1980 The effect of a course on death and grief on nurse's attitudes toward dying patients and death. *Death Education*, **4**, 245-260.

Murray, P. 1974 Death education and its effect of the death anxiety level of nurses. *Psychological Reports*, **35**, 1250.

中川泰彬・大坊郁夫　1985　日本版 GHQ 精神健康調査票手引.　日本文化科学社.

Neimeyer, R. A. 1988 Death anxiety. Wass, H., Berardo, F. & Neimeyer, R. A. (Eds), Dying: Facing the facts (2nd edition). New York: Hemisphere.

小倉学・中村邦子　1989　死の教育の目標と内容について　第１報　死の教育の必要性と目標について.　学校保健研究, **31**, 531-540.

大倉透　1985　老人と子どもと死の教育.　樋口和彦・平山正実（編）生と死の教育―デス・エデュケーションのすすめ.　創元社, pp.54-77.

大野久　1984　現代青年の充実感に関する一研究.　教育心理学研究, **32** (2), 100-109.

Papadatou 1997 Training health professionals in caring for dying children and grieving

families. *Death Studies,* **21**, 575-600.
鈴木真由子　2001　学校における“いのち教育”の展開へ向けて―「人の死」を取り上げることに対する教員の意識―．日本死の臨床研究会（編）第25回日本死の臨床研究会プログラム・予稿集．死の臨床, **24** (2), 211.
鈴木康明　2000　おわりに／生と死から学ぶいのちの教育．鈴木康明（編）現代のエスプリ　生と死から学ぶいのちの教育．394, 193-201.
Spss Inc. 2000 Spss Base 10.0 Applications Guide. Spss Inc.
高木慶子　1999　心の教育　生と死の教育　教育現場で実践できるカリキュラム．兵庫・生と死を考える会.
竹内幸江　2001　人形劇を用いた子どもへのデス・エデュケーションの試み．日本死の臨床研究会（編）第25回日本死の臨床研究会プログラム・予稿集．死の臨床, **24** (2), 208.
田村恵子・二見典子　2002　ホスピス・緩和ケア病棟における看護師の教育プログラム―現状とこれからの課題―．ターミナルケア, **12** (3), 191-195.
丹下智香子　1999　青年期における死に対する態度尺度の構成および妥当性・信頼性の検討．心理学研究, **70**, 327-332.
徳丸定子・北原利枝・石塚智子・田宮仁　1999　「生と死の教育」のための教材開発－小学校高学年向け教材－．日本家政学会誌, **50** (11), 1189-1196.
Wittmaier, B.C. 1979 Some unexcused attitudinal consequences of a short course on death. *Omega,* **10**, 271-275.
Yeaworth, R., Kapp, F. & Winget, C. 1974 Attitudes of nursing students toward the dying patient. *Nursing Research,* **23**, 20-24.